

ヴェネチアガラス

—見て使用する身近な芸術—



~menù~

1. 研究日程
2. 研究の目的
3. 研究の成果報告
 - (1) ヴェネチアガラスの歴史
 - (2) 鑑賞の点からのヴェネチアガラス
 - (3) 使用の点からのヴェネチアガラス
 - (4) 装飾の点からのヴェネチアガラス
 - (5) ヴェネチアガラス制作体験
～L'albero Venezia にて～
 - (6) マエストロ(職人)の思い
4. 研究を終えた感想



1. 研究日程（日本発着日程は省略）

	滞在地	行動・調査内容
第1日目	ローマ→フィレンツェ	<ul style="list-style-type: none"> ・空港からフィレンツェへ移動 ・サン・ジョヴァンニ洗礼堂でモザイクの鑑賞
第2日目	フィレンツェ	<ul style="list-style-type: none"> ・サンタ・クロチェ教会でステンドグラスの調査 ・フィレンツェ市内の建物のガラスを見る
第3日目	フィレンツェ→ヴェネチア	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴェネチアへ移動 ・サンマルコ寺院入口のモザイクの検証 ・コッレール美術館にて当時の生活の中のガラスを鑑賞
第4日目	ヴェネチア	<ul style="list-style-type: none"> ・カ・ペーザロ、カ・レッツォニコを訪れ、ヴェネチアガラスの当時の生活の中での位置づけを確認 ・ペギー・グッゲンハイム・コレクションでガラスの現代アートを鑑賞
第5日目	ヴェネチア	<ul style="list-style-type: none"> ・L' isolaを訪れ、インタビュー ・モダンなヴェネチアンガラスの特徴を知り、販売者の思いを調査 ・ヴェネチア市内のガラスショップを散策 ・3、4日目の調査のまとめ
第6日目	ヴェネチア（ムラノ島）	<ul style="list-style-type: none"> ・ムラノ島へ移動 ・ガラス博物館でヴェネチアガラスの歴史を学ぶ ・サンタ・マリア・エ・ドナト聖堂でガラスのオブジェを鑑賞
第7日目	ヴェネチア（ムラノ島）	<ul style="list-style-type: none"> ・ムラノ島へ移動 ・ガラス工房の見学、インタビュー ・ムラノ島のガラスショップを散策 ・本島へ戻り、ヴェネチアガラスのミリアフィオーリを用いた作品作りの体験、職人さんへのインタビュー
第8日目	ヴェネチア→ローマ	ヴェネチアから空港へ移動

2.研究の目的

私たちは、現在イタリア・ルネサンス絵画を専攻とするゼミに所属している。その授業の中でシエナ大聖堂の最も古いとされる円形ステンドグラスをはじめ、その他のイタリア各地の聖堂の様々なステンドグラスやガラスのモザイクについても学んだ。この光を透過してきらびやかに輝くガラスの神秘に私たちは強く心惹かれた。そこでこれらを形成しているガラスの美や、作品の伝統について調べたいと思い、ヨーロッパ社会で最も進んだガラスの生産地であるヴェネチアガラスをテーマとした。

ヴェネチアではいくつか貴族の邸宅が公開されており、ここではヴェネチアガラスのシャンデリアや食器などが当時を偲ばせる姿で設置されている。ガラス用品を本来使われていたありのままの空間で鑑賞することで、ガラスの美はもちろんのこと、美術作品を理解するうえでの「機能」や「コンテクスト」の重要性を認識したいと思う。

さらにムラーノ島では現在も手作りでヴェネチアガラスの製造が続けられている。多くの時間と手間、そして高い技術がこめられた伝統的な手作りの作品が今も人々に愛される魅力とは？そして工房で伝統を守りながら作品を作り続ける職人の思いをインタビューする。またガラス博物館を訪れてヴェネチアガラスの歴史を知り、ヴェネチアガラスが辿ってきた道のりの理解にも努め、イタリアにおける芸術活動の伝統に触れるきっかけとしたいと考える。

最後にフィレンツェの洗礼堂や教会の中のステンドグラスなども調査し、イタリアにおけるガラス文化を広く知りたいと思う。

3. 研究の成果報告

(1) ヴェネチアガラスの歴史

ヴェネチアガラスは約千年前、日本で言えば平安時代中期に製造が始まった。東方貿易によるイスラム諸国のガラス製品はヴェネチアに巨万の富をもたらしたことから、政府はイスラムのガラス職人を引き抜き、自国での生産を始めた。1291年ガラス工房と職人たちは、技術の流出を防ぐためにムラーノ島に強制移住させられるという厳しい管理下に置かれたが、一方で政府によって手厚く保護を受けることにもなり、ムラーノ島のガラスは飛躍的に発展を遂げた。そして栄華と繁栄を極め世界に名を残すガラスとなっていくのである。だが17世紀以降台頭してきたトルコやヨーロッパ勢力により共和国は弱体化し、ヴェネチアガラスのデザインや技術は盗まれ市場の独占は困難になった。18世紀以降、ヴェネチアはガラスの生産量においては、ボヘミアやドイツに押され、ヴェネチアガラスの栄華はここで幕を閉じる。だが独自の文化を守り続け、その独特の技法を使った美しいガラスは現代にも受け継がれ、今でもヴェネチアガラスは世界中のガラスファンを虜にしている。

.....

ヴェネチアガラスの使用用途を鑑賞、使用、装飾の大きな三つの区分に分け、調査したことをまとめる。

.....

(2) 鑑賞の点からのヴェネチアガラス

邸宅美術館のシャンデリア

邸宅美術館（コッレール美術館、カ・ペーザロ、カ・レッツォニコ）では豪華できらびやかなヴェネチアガラスのシャンデリアが主に見受けられた。当初シャンデリアは照明として使用の役割をもっているという認識だったが、実際に目にするとそれはただの照明というより、むしろ芸術の要素をもった部屋の中心的存在であった。特にコッレール美術館ではシャンデリアに加えてヴェネチアガラスの床もあり、当時の邸宅ではヴェネチアガラスが見る対象として取り入れられ、豪華さを示していたことが分かる。



聖堂のステンドグラス

フィレンツェのサンタクロッチェ大聖堂には宗教的な絵が描かれたステンドグラスが数多く存在した。聖堂の中は照明が少なく、薄暗いのだが、ステンドグラスは外の光を透過して輝いてみえるので絵画よりも色彩が鮮やかに見える。また色ガラスを透過した光が七色の光となって床にうつっている所もあった。ステンド



▲ガラスのキリスト

グラスの存在によって、聖堂がきらびやかでより神々しさが増している印象を受けた。サンタ・マリア・エ・ドナト聖堂には何とヴェネチアガラスで作られた十字架のキリストが飾られている。これは1979年に Ermanno Nason によって作られた作品で、衣服のしわ、肌の滑らかさ、キリストの苦痛の顔まで精巧に表現されている。このようなガラスのキリストは他の聖堂では目にすることができず、まさにヴェネチアらしさを体験することができる作品であった。

(3) 使用の点からのヴェネチアガラス

ガラス博物館の展示物

ここでは約16世紀から現代までのヴェネチアガラスの歴史を見ることができる。一見展示物というと、鑑賞の対象として捉えてしまいがちだが、16世紀のガラスのコップなどは透明感が高く、淵には金色の装飾が描かれたシンプルな装飾で実際に使用するために作られたものであった。逆に18世紀のテーブルオーナメントなどは非常に豪華、20世紀の作品はカラフルな色でスラリとした形のコップや皿、オブジェなどがあり、現代独自のスタイルを持っていた。またガラスでできた貴重なシェブロンビーズが展示されており、これがお金として古くは使用されていたことも驚きだった。

(4) 装飾の点からのヴェネツィアガラス

ガラスショップのアクセサリ

ヴェネチアにはガラス製品を取り扱った数多くのショップが存在する。装飾の観点からはこうしたショップで売られているブレスレットやネックレス、そしてガラスの時計や電灯などに出会った。ヴェネチアガラスで作られた品々は一つ一つがガラス職人の手作りであるため、デザイン性が非常に高く、インテリアとしても機能する作品が多い。そのため通常は使用として分類できる時計や電灯が、同時に装飾としても機能していた。アクセサリで使われているヴェネチアガラスはどれも宝石のような輝きを放ち、アドリア海の宝石と呼ばれるのも納得であった。



▲購入したヴェネチアガラスの時計

(5) ヴェネチアガラス制作体験～L'albero Venezia にて～

私たちはヴェネチアガラスのアーティスト Pino さんと、奥さんの Kanae さんが経営される L'albero Venezia というヴェネチアガラスのショップでガラスの作品作りの体験とインタビューを行った。

～体験で使用したヴェネチアガラスの種類～

<p>クリスタッロ</p> 	<p>透明のガラス。様々な色がある。 完成した作品の凹凸を埋めるために、最後に上から敷き詰めると、焼きあがった後クリスタッロの下の模様が透けて見え、立体感が生まれる。</p>
<p>オッパーノ</p>	<p>ミルクカラーのガラス。 同じガラスでも火加減で色が変わる。</p>
<p>パスタ</p> 	<p>光を通らないもの。 原色のカラーが多く、イタリア人はこの原色を好むのだそう。</p>
<p>ミリフィオリ</p> 	<p>千 (Mille) の花 (fiori) という意味。名前の通り、断面が花のような模様をしている。現在ミリフィオリを制作する工場はムラノ島に一社しかない。</p>
<p>シェフロンビース</p> 	<p>これは体験で使用することはできないが、長い歴史をもち、古くはお金としてアフリカに渡っていた貴重なビースということで紹介していただいた。</p>
<p>アヴェントゥリーナ</p>	<p>銅のフレークが入った金色のガラスを溶かし込んでつくったビース。茶、紺、緑（とても貴重！）がある。</p>
<p>ザンフィリコ</p> 	<p>1600年代に登場し、ヴェネチアガラスの価値を一気に上げたもの。ガラスの食器などに用いられる。非常に高価。</p>
<p>フィリグラータ</p>	<p>ザンフィリコ同様、ガラスの食器などに用いられる。こちらも非常に高価。</p>



体験の様子。好きなガラスを選んでカットし、あらかじめ選んでおいた型にはめこんでゆく。

店内には Pino さんオリジナルの作品や、貴重なガラスが所狭しと並べられている。

(6) マエストロ（職人）の思い

私たちはムラノ島の berengo studio というガラス工房の職人たち、L'albero Venezia の Pino さんと Kanae さん、そして L'isola というモダンなヴェネチアガラスのショップの方にそれぞれインタビューを行った。

berengo studio のマエストロたち

この工房のマエストロたちはおよそ 20 年ほど修業を積んでいた。一日に作られる作品は花瓶やオブジェなどおよそ 10 点。ヴェネチアガラスの一番の魅力は？と尋ねると、

「毎日完成する作品の色や形が違うから、面白いんだ！」と語ってくれた。逆に作品作りでの苦勞を尋ねると、「形を作ること」だと言われた。ガラスは非常に繊細で窯で焼きあがるところまで上手くいっても最後にひびが入ったり、ほんの少し欠けてしまうだけで商品として使い物にならなくなるそうだ。またムラノ島のヴェネチアガラスの人気の理由については「ガラス製造の中心地であり、ヴェネチアガラスは 700 年以上の長い歴史があるから」ということだった。



ムラーノ島には berengo studio の他にも約 100 近くの工房が存在する。このような工房で伝統を受け継いだ職人によって作られるヴェネチアガラスは、現代の大量生産とは違って、毎日形やガラスの透明度、色合いが異なり、世界に二つとない作品になる。極限まで完璧な作品を求め、一つ一つ丁寧に作業を行う職人たちの光景は、まさにイタリアを代表する文化そのものだった。



▲非常に暑い工房でガラスを成形するマエストロたち



L'isola

通りを歩いているとおしゃれで高級感漂うガラスがショーウィンドウに並ぶお店がある。それが L'isola である。ここでは現代のヴェネチアガラスを代表する工房「カルロ・モレッティ」の作品を取り扱っている。そのカラフルでユニークなデザインから美術館にも展示されている作品もあるそうだ。今回は工房ではなく、作品を販売しているお店の方にお話を伺った。

ヴェネチアガラスの好きなところを尋ねると「やっぱり色、形、透明度が高い所ね。特にカラフルな物が好きよ！」と話してくださった。また作品を実際に使用することはあるのか尋ねると、飾るだけではなくて、デカンタやワイングラス、ウィンドウに飾ってあるお皿などを使用する人もいるのだそうだ。

店内の作品はどれも非常にデザイン性が豊かで、確かにこれで食事をすればより一層美味しく感じるだろうと思った。伝統的な製法を守りながらも 13 世紀や 16 世紀頃のヴェネチアガラスとは全く異なる個性的な作品の数々はヴェネチアガラスの明るい未来を象徴しているように感じた。



▲ミリフィオリのお皿。非常にカラフルな作品。

L'albero Venezia

L'albero の職人、Pino さんは 51 年間ヴェネチアガラスの修業を積んでこられた。ガラスを削るバットウッタという卓越した技法をもち、「ガラスをするために生まれてきた」と言われるほどの才能の持ち主である。ヴェネチアガラスはやはり全ての作品が違ってくるのが魅力的だそうで、窯出しの瞬間は毎回わくわくすると話してくれた。逆に最も大変なことは窯入れで、その理由は焼く時間などマニュアルがないためということだった。例え上手くいっても窯出しの際にわれてしまったりという地道で大変な工程があるので、作品には高い値段がつくのだそうだ。

Pino さんと Kanae さんは日本でも冬に体験工房を開かれている。「飛び出す絵本」と称した Pino さんの高度な技術がつまったオリジナルのガラス作品はとても繊細で、他では目にすることのない奇抜で新しいデザインに多くの方が関心を示している。このような取り組みによって日本でも年々ヴェネチアガラスの存在が浸透してきているそうだ。Kanae さんは、今後もっと日本にヴェネチアガラスの奥深さを広めていきたいという強い思いをもって日々制作活動を行っている。



▲中央の木が Pino さんの「飛び出す絵本」。元の大きさから焼く度にギュッと収縮させてゆくマイクロフィジオーネという高度な技法が使われている。

4. 研究を終えた感想

ヴェネチアガラスの輝きは長い間世界中の人々を魅了してきた。しかしその歴史の中には、暗黒の時代と呼ばれる衰退の危機もあった。この危機を乗り越えられたのは、紛れもなくイタリアのマエストロたちの洗練された技術とガラス工芸の伝統を守り続けた熱い思いである。実際に工房やショップを訪れ、多くの作品を目にしたが同じ作品は一つも存在しなかった。使用するガラスの種類や量、窯入れの温度、焼き時間、その時の湿度や天気といった様々な要素が合わさり、やっと一つの作品が生まれる。その要素の組み合わせには限りがないので、作品の可能性も無限大になるのだ。マエストロや、ショップの方へのインタビューでもヴェネチアガラスの魅力は、長年働いていても毎日違った作品に出逢えることだと口をそろえて語ってくださった。

ヴェネチアガラスは時代によって、それぞれ大まかな特徴がある。最も古いベニス王国の時代などは、ヴェネチアガラスは宝石と同等に扱われ、お金の代わりとして価値があったという。しかし食器などの装飾は今よりもシンプルなものが多かった。当時アフリカに渡り、現地の人々が身につけていたシェブロンビーズは、今日イタリアなどに逆輸入されて戻ってきており、コレクターたちの間で非常に人気のある貴重なビーズとなっている。16～18世紀ごろは、私たちが訪れたコッレール美術館やカ・ペ



▲ムラノ島のガラスのオブジェ

ーザロなどの貴族の邸宅に見てとれるように、華やかな装飾が施された豪華絢爛なヴェネチアガラスのシャンデリアやヴェネチアンミラーなどが貴族の間で流行した。そして現代では、カラフルでユニークな食器やオブジェ、アクセサリとして、人々の人気を博している。このようにヴェネチアガラスはその伝統を守りながら、時代によって新しい変化を取り入れているのである。

今回私たちは、ヴェネチアガラスの機能を鑑賞、使用、装飾の三点から調査した。その結果ヴェネチアガラスの食

用の目的で作られたガラスの生活用品でここまでデザイン性を意識したものは少ないだろう。ヴェネチアはもちろん、フィレンツェでも聖堂や通り、通常の家々にこうしたデザイン性の高いガラスの照明やオブジェは数多く見られ、イタリアの多くの都市でガラス文化が深く浸透していることが分かった。

この研究を通じてヴェネチアガラスの歴史やその美しさ、そしてマエストロたちが語り継ぐ伝統に触れたことで、私たちの芸術に対する意識は非常に高まった。実際にマエストロたちの仕事を目にするという貴重な経験を経て、最も感じたことは伝統を受け継いだ手作りの作品だけがもつ洗練された美である。あらゆるガラス製品が大量生産される現代とは対照的に、取材をした工房では、一日に作られる作品の数はおよそ 10 個程度だった。しかし数が少なくてもイタリアの職人たちは、一つ一つ丁寧にガラス本来がもつ美しさを引きだし、作品を生み出していた。そうして思いが込められた作品は、どれも独創的で深い魅力がある。モノが溢れかえった日常を当然のように感じていた私たちにとって、このヴェネチアガラスが放つ輝きは、芸術とは本来身近な存在であることを気づかせてくれた。有名な絵画や彫刻だけではなく、周りを見渡してみれば、様々なモノがそれぞれの美しさをもっているのだ。こうした美に対する感覚や学んだ知識を生かしながら、今後も芸術と向き合っていき、伝統あるヴェネチアガラスの魅力も日本に伝えていきたいと思う。



◆ 参考文献

- ・井澤豊一郎、2011年、『ヴェネツィア「美の遺産」を旅する』、世界文化社